

南アルプス市立小笠原小学校 第一回自己評価書

令和3年8月19日作成

校長： 飯久保 一男	記述者・職名： 志村 征俊・教頭
<p>学校教育目標</p> <p>校 訓「あかるく かしく たくましく」</p> <p>教育目標「自分を大切にし、他者を大切にする」子どもの育成</p> <p>具体目標 (1) 労をいとわず働く子 (2) 自分を明るく表現できる子 (3) 進んで学ぼうとする子 (4) 思いやりがあり、礼儀正しい子 (5) 健康でたくましい子</p>	
<p>本年度の学校経営理念と方針</p> <p>「喜んで登校し、満足して下校できる」明日が待たれる学校の創造</p> <p>①安全・安心な学校づくりの推進 ②教育の不易と流行の見定めと率先垂範による教育の推進 ③研究研修活動を活性化し、自ら学ぶ授業づくりの推進 ④楡形地区小中連携をとおして地域が一体となった教育の推進 ⑤学校評価システムによる学校経営の推進</p> <p>学校経営目標・具体的な取り組み</p> <p>真の「かっこよさ」を求める子ども</p> <p>①お互いを思いやる「かっこよさ」 学校教育目標「自分を大切にし、他者を大切にする」子どもの育成の意識化、共有化、日常化 小笠原流礼法の極意である「相手を大切に思う心」を「自然に表現できる」子どもの育成</p> <p>②お互いを高めあう「かっこよさ」 楽しくわかる授業と学力・教師力の向上 楽しい学校・学年・学級の創造</p> <p>③当たり前の「かっこよさ」 当たり前のことを積み重ねていくと、特別になる 基本的な生活習慣、学習習慣、行動習慣の定着 環境の整備</p>	
I 評価方法	
<p>児童、保護者、教職員の3者に対して、アンケート用紙により回答を得た。質問に対しての回答選択肢は基本的に4段階になっている。</p> <p>A：とても・よく～している B：だいたい～している C：あまり～していない D：～していない</p> <p>の4段階で、このうちAとBは肯定的なプラス評価であり、CとDは否定的なマイナス評価である。AとBのどちらを選ぶか、CとDのどちらを選ぶかについては、回答者の判断材料の有無・性格・回答時点の状況等が関係するため、A・B・C・Dを厳密に区別して集計することよりも、A・B合わせてのプラス傾向、C・D合わせてのマイナス傾向として集計する方が、全体的な傾向をつかみやすくなる。</p> <p>そこで、A・B・C・Dの選択肢を点数化し、A=4、B=3、C=2、D=1として集計し、回答者数で割って平均点数をもとめた。平均点数は次のような意味をもつ。</p> <p>○全体にプラス評価（A・B）が多ければ、平均点は2.5点以上になり、4点に近づいていく。</p>	

○全体にマイナス評価（C・D）が多ければ、平均点は2.5未満になり、1点に近づいていく。

なお、保護者、児童のアンケートには回答の選択肢として E：わからない があるが、これは点数には含めていない。

Ⅱ 全体評価

○教職員の自己評価、児童アンケート、保護者アンケートのそれぞれの集計結果を見ると、いずれも昨年度と同様で、肯定的な評価の値が高い結果となった。

（今年度から学校評価の評価項目を見直し、回答方法も Google form を使って web 上で回答する形式に変更した。評価項目及び回答方法は楡形地区で概ね統一した。）

- ・教職員の自己評価の結果は、21の質問項目に対し、すべての項目で評価の平均が3.0を上回る高い評価結果であった。
- ・児童アンケートの結果は、20の質問項目のうち、19の項目で評価の平均が3.0以上のプラス評価だった。評価の平均が3.0を下回ったのは「わたしは、授業中に自分の考えを伝えている」の1項目だけだった。
- ・保護者アンケートの結果は、13の評価項目のうち、平均点数化できる8の項目全てで評価の平均が3.0以上のプラス評価だった。

以上のことから、小笠原小学校では学校経営方針に基づき、教育目標の実現に向けて、一人一人の教職員が保護者の理解と協力のもと、それぞれの職務を遂行してきたことにより、教育活動全般にわたって適切な指導が行われ、そのことが児童や保護者に肯定的に評価されていると考えられる。従って、本校の学校評価に係る総合的な評価は概ね良好な水準にあると言える。

しかしながら、一つ一つの結果に目を向けてみると、マイナス評価の項目や、プラス評価ではあるがポイントが低い項目が各調査で見られる。教職員、児童、保護者のそれぞれの調査について、以下の「Ⅲ アンケートごとの評価」で考察し、課題を明らかにしていきたい。

Ⅲ アンケートごとの評価

教職員の自己評価アンケートについて

教職員の回答項目中には、平均ポイントが2.5を下回るマイナス評価の項目はなかったが、プラス評価の中でも評価の比較的低い項目（平均ポイントが3.25未満の項目）は次の3つだった。

17「あなたは、学校の教育活動について、おたよりやホームページを通して保護者や地域に広報していますか。」（保護者・地域との連携） 3.03

18「あなたは、教育活動の中に地域の人材や施設を活用し、地域の教育力を生かす指導を行なっていますか。」（保護者・地域との連携） 3.08

20「あなたは、深い学びになるよう、課題や発問の工夫をしていますか。」（小中一貫） 3.23

【考察・改善策】

「あなたは、学校の教育活動について、おたよりやホームページを通して保護者や地域に広報していますか。」の項目が低い評価になっていることについては、学級担任が学年だよりや学級だよりなどで保護者に学校の様子を定期的に発信しているものの、ホームページの更新を学校長に任せてしまっていることが原因の一つとして考えられる。教職員一人一人の意識の違いにもよるのだが、保護者アンケートの結果、91.5%がホームページやおたよりから教育活動の様子を知ることができると回答していることから情報発信は概ねできていると言える。しかしながら、児童の健全育成のために、家庭や地域と共通認識を図ることは大変重要であることから、これからも、ホームページや学校・学年・学級だよりなどを用いて学校生活の様子を積極的に発信していったり、連絡帳や電話連絡によって保護者との連絡を密にしたりす

るなどの手立てを用いていきたい。

「あなたは、教育活動の中に地域の人材や施設を活用し、地域の教育力を生かす指導を行なっていますか。」の項目については、新型コロナウイルス感染症拡大防止のための様々な制約が影響していると考えられる。地域人材や施設の活用について計画を立てていても実際に実施することができなかつたり、計画段階で人数や実施時期に制限があり、計画を断念せざるを得ない状況にあつたりするのが現状である。その中でも、各学年の学習内容に応じて地域の教育力をできる限り生かしていけるよう、教育課程の工夫や感染対策の徹底などを行ってきたい。

「あなたは、深い学びになるよう、課題や発問の工夫をしていますか。」の項目については、今年度、校内研究でも取り上げている課題である。児童の「深い学び」とはどのような状態なのか、また「深い学び」に向けて職員がどのような授業を仕組んでいったらいいかを学び合っているところである。児童の学習場面でも感染症対策の徹底が求められるため、児童相互のソーシャル・ディスタンスの確保や対話的な学習の積極的な取り組みが難しいといった状況も「深い学び」の実現を困難にしている原因の一つとなっていることが考えられる。今後、新しい生活様式に沿いながらいかにして「主体的・対話的で深い学び」を実現させていくかが大きな課題の一つである。

児童アンケートについて

児童の回答項目中には、平均ポイントが2.5を下回るマイナス評価の項目はなかったが、プラス評価の中でも評価の比較的低い項目（平均ポイントが3.25未満の項目）が次の4つだった。

8「わたしは、家の人に学校のようすを話している。」（豊かな心）	3.14
11「わたしは、授業中に自分の考えを伝えている。」（確かな学力）	2.93
13「わたしは、本を読んでいる。」（豊かな心）	3.22
15「わたしは、早寝早起きをしている。」（健やかな体）	3.13

【考察・改善策】

「わたしは、家の人に学校のようすを話している。」や「わたしは、早寝早起きをしている。」の項目については、家庭での生活時間帯の変化も原因の一つと考えられる。家庭でゆつくりと学校の様子を話す時間が取れない家庭も少なくないだろう。そんな中で、学校の様子をホームページやおたよりでお知らせしたり、連絡帳や電話連絡で保護者との連絡を密にしたりすることで、それをきっかけに家庭での会話が生まれたり、学校への理解にもつながったりするのではないかと考えた。また、児童の健康管理についても保健だよりや学年だよりなどを通して、家庭への呼びかけを行ってきた。引き続き啓発活動に力を入れ、保護者の協力を得る中で、児童の健康管理にも取り組んでいきたい。

「わたしは、授業中に自分の考えを伝えている。」は全項目の中で最も評価が低く、唯一2点台だった。まずは小集団の中で、自分の考えを発信する経験を重ねていくことで評価の改善を図っていくことができると考える。昨年度、新型コロナウイルス感染症拡大防止のために少なくしてきた授業中の対話的な学び（ペアや小集団での学び合い活動）を、状況を見ながら授業の中に適宜取り入れたり、児童に関わりのスキルやコツを身に付けさせるために取り組んでいる「あやめっ子タイム」を実施したりすることで、児童の発言を促していきたい。また、「あやめっ子タイム」の取り組みの効果として、共感的な人間関係を育み児童の自尊感情を高めることも期待できる。「あやめっ子タイム」に取り組んでいくことで、「困ったときに相談できる友達」づくりを進めていくこともできるだろう。

「わたしは、本を読んでいる。」については、朝読書の時間の確保だけでなく、授業時間を利用しての図書室の利用等、読書の機会を確保するとともに、図書だよりやおすすめの本の紹介など様々な取り組みが行われている。今後も、これまでの取り組みを継続しつつ、児童が興味を持てるような工夫を取り入れながら本に触れる機会を増やしていくことで、「本が好きな子」を増やし、読書に親しむ態度を育てていくのではないかと考える。

上記の項目以外にも、「わたしには、困ったことがあったら相談できる友達がいる。」や「わたしには、困ったことがあったら相談できる先生がいる。」といった項目に対して「いない」と答えた児童が少なからずいることも見過ごすことができない。このことから、友達や先生との関わり方が分からなかったり、自己開示・自己表現がうまくできなかつたりする児童の姿が浮かんでくる。授業の中での学び合いや「あやめっ子タイム」の取り組みとともに、受容的な集団づくりに努めていくことで、これらの改善が図られるのではないかと考えられる。

保護者アンケートについて

保護者のアンケート調査では、マイナス評価はなかったが、プラス評価の中でも比較的评价ポイントの低い項目に着目してみた。

- | | |
|---|------|
| 2「お子さんは、授業の内容が分かっていますか。」 | 3.08 |
| 4「お子さんは、家庭学習（宿題や塾・家庭教師との勉強を含む）をしていますか。」 | 3.07 |

【考察・改善策】

この結果から、児童の学習に関することで不安や悩みがあることが分かった。学校経営目標にもあるように、今後も「楽しくわかる授業と学力・教師力の向上」を目指し、一人一人が研鑽を積むとともに、校内研究を通して教職員も学び合い、楽しくわかる授業づくりに向けて、全教職員で取り組んでいきたい。さらに、各学級において、保護者との情報交換を密にし、児童の様子について相互理解を図ることも大切である。新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、保護者に学校に来ていただく機会は少ないが、電話連絡や連絡帳を使って情報交換を行ったり、個別懇談等の機会を大切にしたりするなどして、保護者との連携に努めていきたい。普段の何気ない保護者との会話の中で、保護者の悩みを受け止めることも必要だと考える。

本校では養護教諭・特別支援コーディネーターを中心にSC（スクールカウンセラー）や市の子育て支援課、さまざまな相談機関や医療機関に繋いだり、連携して支援にあたったりするシステムが整っている。これらを活用し保護者の悩みを軽くし、児童の健やかな発達につなげていきたい。

IV ま と め

アンケート調査の結果から、本校の教職員は学校長の示す学校経営理念と方針、学校経営目標を、日常の職務を遂行するための行動指針（具体的な目標）として意識し、日々の業務に使命感と責任を持って取り組んでいると考えられる。また、そうした教職員の姿勢が、児童が楽しく、充実した学校生活を送ることができることにつながっており、保護者からも一定の評価をいただいていると考えられる。

児童アンケート、保護者アンケートの結果を見ると、安定した学校運営がなされており、そのことが児童や保護者に評価されていると考えられる。しかしながら、児童アンケート、保護者アンケートの結果において評価の低かった項目は、家庭学習の充実、早寝早起きなどの家庭での生活改善、困ったことを解決するためのピア・サポート体制の充実など、昨年度までの学校評価からも、長い間課題となっている項目であることがわかる。これらの課題解決に向けては、啓発活動や様々な機関との連携などの継続した取り組みだけでなく、新たな取り組み方法を模索していかなければならない時期に来ているのかもしれない。

学校は本来「学びの場」であり、やはり1時間1時間の授業の充実が、よりよい学校づくりの基盤となっていこう。学校長が本年度のグランドデザインの中で示す「教師は授業で勝負するという気迫を持った教師力」を更に伸ばしていくように一人一人が心がけていくとともに、「小笠原小学校全職員の英知を結集した学校力」を児童のよりよい成長のために発揮できるよう、保護者や地域住民の方々との連携を図りながら、協力して児童の教育を行っていきたい。